

復活節第3主日
ルカ 24・13-35
エマオで現れる

2014.5.4

長崎 壮

(クラレチアン宣教会助祭)

イエスの死で全てが終わってしまったと、あきらめのうちにエルサレムからエマオに向かう弟子たちに復活のイエスが現れます。彼らがどれだけ落胆していたかは、「暗い顔をして」という表現からも伝わってきます。弟子たちは政治的な意味でイエスをイスラエルを解放してくれる方と考えていましたから、そのイエスが一番惨めな十字架刑で亡くなったことを考えれば当然のことでしょう。そのような道行の途上、イエスが付き添ながら歩み始めますが、二人の目は遮られていて、イエスだとは分かりませんでした。

私自身、最初にこの話を読んだとき、どうして弟子たちは主であると気づかないのか不思議に思いました。目が遮られるということが、「心の目が遮られる」という説明を受けても、一体どういうことなのかいまひとつ納得いかずにいました。今日はこのことについて皆さんと考えてみたいと思います。

さて、復活の主とは知らずに、イエスの死について語り始めた彼らに向かって、イエスは「物分かりが悪く、心が鈍く預言者たちの言ったことすべてを信じられない者たち、メシアはこういう苦しみを受けて、栄光に入るはずだったのではないか」(ルカ 24・25-6) と叱ります。ところで、このイエスの叱責の中の「全てを信じられない者」という言葉からは、弟子たちがイエスが十字架に掛けられる前までに聞いた教えのうち、全てではないけれどもある部分は信じてできたと考えられるのではないのでしょうか。

イエスの言葉全てを理解することは無理にしても、素直に受け入れ、信じていくことができていたなら、弟子たちは希望に満ちた信仰をもって復活を待つことができたでしょう。

それではどうして、弟子たちは、全てを信じていくことができなかったのでしょうか……。

人間には無意識のうちに自分の聞きたいことを選んで聞く傾きがあります。

この傾きが、偏見や先入観をつくり出し、素直な理解を妨げ、誤った像をつくりあげるのです。

たとえば、イエスが受難を前にして、弟子たちに向けて自分死の予告をした時、弟子たちは怖くて尋ねることができませんでした（ルカ 9・44）が、これは「救い主であるイエスが、このような死に方をするはずがない」という、自分の理想を否定されることへの恐れから、誤ったイエス像を作っていたからです。

人間の意識・注意力がどれだけ、偏ったものであるかを示すこのような体験を皆さんもしたことがあるのではないのでしょうか。

講演会などを、録音機を使って録音してみると、実際にその場で聞いているときには講演者の声だけはっきり聞こえているのに、後で録音したものを聞いてみると、周りの椅子の動く音や咳払いなど雑音を同じ様に拾っているのです。

このように「知りたいことだけ聞きたい、知りたくないことには、知らないままがいい」というのが私たちの無意識・つまりの心の奥底での働きなのです。

ですから、政治的な意味でイエスを解放者として崇める心のみでは、イエスを見ることはできませんでした。こういった先入観や偏見を取り除くことは確かに難しいことです。

現在の私たちの信仰生活を振り返るとどうでしょうか。自分の望み通りの神様の像をつくって、「神様、このようになりますように」と祈るとき、御聖体のうちに現存するイエス様や、日常生活の中で私たちを助けてくれる聖霊の働きを感じることはできません。

しかし、「神様はいつ、どのような方法であるか分からないけれど、きっと一番素晴らしい恵みを与えてくださるはずだ」と希望に根ざした信頼をもって自らを神様に委ねるとき、共にいてくださるイエスのことを感じることはできるのではないのでしょうか。

「神様の望みどおりに…」と、委託する心は、言い方を変えれば、心（意識）の周波数を神様に合わせることです。周波数が合わない時、神様の像は見えてきません。

エマオに向かう二人の弟子たちの場合、周波数を合わすということはどのよ

うな作業だったのでしょうか。おそらく、イエス様から御言葉の説明を受けて、それがかつて教わった教えと照らし合わせて振り返り、そして御言葉の成就を確認していくことだったのではないかと思います。そして、最終的にパンを裂く姿を見たときに周波数がピタリと合って、「心の目」が開けてイエスであることがはっきりしたのでしょうか。このときのことを振り返って、彼らは「道で話しておられるとき、また聖書を説明して下さったとき、わたしたちの心は燃えていたではないか」とお互い確認し合いました（ルカ 24・32）。

イエスがパンを裂く姿は彼らに主の晩餐の席を思い出させ、十字架上で自分たちのために引き裂かれた愛の極みであるイエスの死の意味を確認したことでしょう。

さて、私たちはこの二人の弟子たちの証言を通して、イエスの復活という神の御言葉、イエスの言葉は、必ず実現するという確証をいただきました。預言者イザヤが「神の言葉は虚しく戻ることはない」（イザヤ 55・11）と宣言した通りです。この確証をいただいた私たちが、ミサの中でイエス様と出会い、そして日々の信仰生活の中で神の御言葉に信頼と希望をおいて歩めるように恵みを願い求めましょう。